

第五福竜丸展示館の50年

市田 真理 (Ichida Mari)

東京、銀座、舞浜（東京ディズニーランドの最寄り駅）からそれぞれ電車で10分、新宿、渋谷、池袋から約30分。羽田空港から40分という立地に、2026年に開館50年を迎える都立第五福竜丸展示館があります。

60年前は「ゴミの島」とも揶揄された夢の島は、現在では背の高い樹々が繁る都立公園です。熱帯植物館、スポーツ施設、ヨットやクルーザーが繫留されているマリーナがあり、明治通りをはさんだ向かい側には江東区立の競技場になっており、週末ともなると各種イベントで賑わいます。

なぜここに、被ばく船・第五福竜丸が保存展示されているのかを記述したいと思います。

1. ゴミの島 夢の島

東京・江東区はその大半が江戸時代から東京湾の海岸線を土砂や瓦礫で埋め立て、市街地や新田等を造成してできた土地です。夢の島は荒川河口に自然堆積した土砂による干潟で、1930年代には飛行場計画、1947年頃には海水浴場として近隣住民に親しまれ、遊園地を作る計画もありました。しかし1957年からはゴミの埋め立て処分場とされ、都内から出されるゴミの7割が夢の島に持ち込まれていたといいます。ハエの発生や悪臭、ごみ処理トラックによる交通渋滞などが大問題となりました。「東京ゴミ戦争」という名称でご記憶の方もおられることと思います。

生活ごみのほかに、船も多数捨てられていたそうです。その中に、1967年3月に廃船処分となった東京水産大学（現・東京海洋大学）の演習船「はやぶさ丸」もありました。「屑化すること」を約束し

て解体業者に払い下げられ、他の船に売却できるような部品やエンジンが取り外された船体は、ゴミの中に放置されていました。これが実は改修された元「第五福竜丸」だったのです。

この事実に気づいた市民が保存を思い立ちます。そこから約10年の保存運動を経て、1976年6月10日、都立第五福竜丸展示館が建設され、ここに永久に保存されることとなりました。保存の取組みを中心的に担ってきた第五福竜丸保存委員会を中心として、第五福竜丸平和協会を設立、1974年に東京都に財団法人として認可され、この財団から東京都に船が贈呈されたのです。筆者は展示館の学芸員で、(公財)第五福竜丸平和協会の事務局長を務めています。

2. 水爆「スラボー」

1954年1月22日、静岡県焼津港を出港したマグロ延縄漁船・第五福竜丸は、23名の乗組員を乗せて一路ミッドウェー海域へと向かいました。ところが悪天候と不漁に見舞われ、南下してマーシャル諸島海域へと向かいます。3月1日未明、まだ薄暗い空が突如光り、空一面真っ赤になるのを目撃します。約8分後には地鳴りのような轟音が届き、漁船の責任者・漁労長の見崎吉男は揚げ縄を指示。乗組員らは揚げ縄作業に入ります。その彼らに降り注いだのが放射性降下物でした。

その時の様子を、元乗組員の手記から引用します（原文ママ）。

一やがて空は白みはじめ、閃光のあった西の水平線を覗くと、入道雲を三つ四つ重ねたような雲が空を突いていた。すでに雲は成層圏に達し、キノコの形

はしていなかった。頂上は崩れて広がり、見る見るうちに風上にいる俺たちのほうに覆いかぶさってきた。「風上に、なぜだ」と、不思議に思っていた。

二時間、いやもう少し経ったかもしれない。晴れていた空は、そのキノコ雲で覆いつくされ、低気圧でも通過するよかのように一変した。風は雨をともない波も立ちはじめた。気がつくやうに、白い粉が雨に混じっている。「何だ、これは…」と、思っているうちに雨は止み、白い粉だけになった。まるでみぞれが降るのと同じだ。そしてデッキの上にも白く積もり、足跡がつくようになっていた。(中略) 粉には危険は何も感じなかった。熱くないし臭いもない。なめても砂のようにジャリジャリして味もない。ただ揚げ縄は風上に向かっての作業なので、首元から下着や目の中にたくさん入り、チクチクと刺すように痛く、真っ赤になった目をこすりながら辛い作業を続けた。(大石又七, 2003)

白い粉と感じられたものは、サンゴの欠片でした。「ブラボー」というコードネームが付された15メガトンの水爆実験により、サンゴ礁が破壊されサンゴ片が舞い散ったものでした。この爆発で深さ60m、直径約2kmのクレーターが生じました。いま、航

空写真で見ても、はっきりとわかります。サンゴ片には核爆発によって生じた核分裂生成物や、爆弾の構成成分に中性子が照射されて生じた放射性物質等が付着していました。漁労長が天測を行っていたことと、光の目撃から音の到着まで8分間はあったであろうということから、船は東経166度35分、北緯11度53分、つまり実験が行われたビキニ環礁から160km付近にいたと推定されています(写真1)。これはアメリカが設定した「危険区域」の外になります。

ビキニ環礁の東約180kmに位置するロンゲラップ環礁には82人の住民が、470kmのウトリック環礁には157人が住んでおり、両環礁の人びともまた夜明け前に、西の空に明るい光を目撃し、その後ロンゲラップでは昼少し前から、白い粉状のものが降り始め、ウトリックでは午後遅くに島全体が霧がかかったようになったとの証言があります。

第五福竜丸の乗組員は、その夜から頭痛や吐き気に見舞われ、肌の黒ずみ、脱毛が起きました。ロンゲラップの人びとも下痢、嘔吐、皮膚疾患、脱毛が起きています。

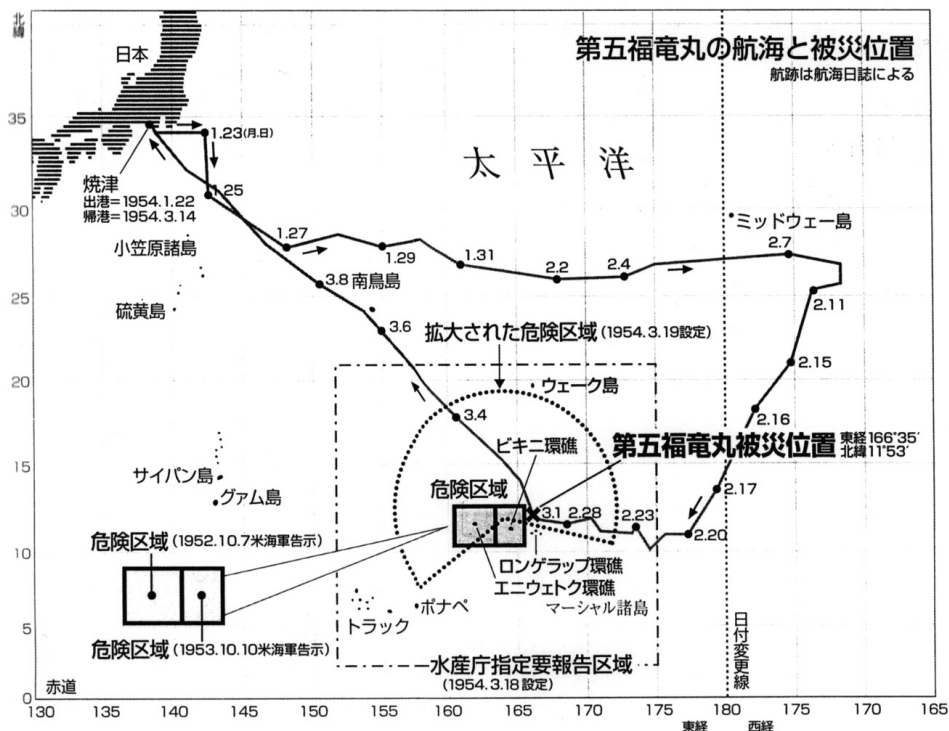


写真1 第五福竜丸の航海と被災位置

3. 「ビキニ事件」

3月14日、焼津に帰港した第五福竜丸の乗組員は、地元の病院で診察を受け、そのうち皮膚のただれや脱毛の酷い2名が東大病院へと向かいます。その際、船に降りおちた「白い粉」を持参し、東京大学医学部中泉正徳教授を経由して理学部の木村健二郎研究室へと持ち込まれました。のちに静岡大学、大阪市立大学、金沢大学でも分析されます。

第五福竜丸の漁獲物は14都道府県に流通し、静岡県内、関西方面では多数が食し大騒ぎとなります。石川県や北海道では市場に入る前に廃棄処分、東京では築地市場に入荷したものの通報があり、理化学研究所山崎文男研究室から人が派遣されGM計数管で検査したところ放射線が検知され、土中廃棄されました。同時に、厚生省（当時）公衆衛生局の指導で指定5港（塩釜、東京、三崎、清水、焼津）では市場に入った魚体から10cm離して100カウント毎分以上は「汚染」とみなして廃棄することが義務づけられます。この東日本5港だけではとうてい追いつかず、1954年12月末まで全国18港でのマグロ・カツオ類の検査が行われ、少なくとも延べ992隻が「汚染魚」を廃棄させられました。船体や人体の外部線量測定も行われ、外務省を通じて米国へ報告されました。船上での生活は海水を多く使用し、なかには漁獲物の内臓を食べる習慣もありますが、船員たちの健康追跡調査は、その後は行われていません。

消費者は「原子マグロ」「原爆マグロ」と呼んで恐れ、魚類全般が売れなくなるという水産被害が発生しました。また全国各地の雨からも放射線が検出される事態となり、「放射能雨」という言葉が報道のみならず詩や絵画、川柳や風刺画等にも登場します。遠くの知らない船の事件ではなく、生活の中に「放射能」という言葉が入り込んできた集団的な記憶となりました。そして原水爆禁止署名運動が盛り上がり、翌1955年8月には3200万筆を超える署名が集計されます。

そうしたさなか、焼津の病院から東京へ移送された第五福竜丸乗組員23人のなか、年長だった無縁長の久保山愛吉が、被災207日後に亡くなりました。

日米政府は事件発覚直後より外交交渉を重ね、翌1955年1月4日に「交換公文」をかわし、米国の法的責任を追及はしないと、200万ドル（7億2,000

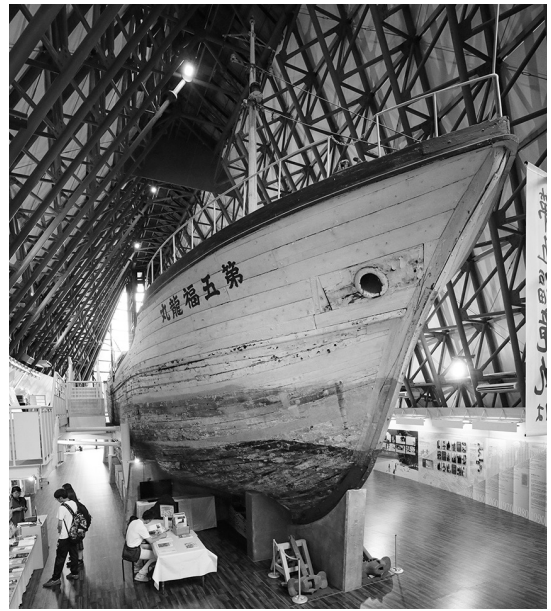


写真2 展示館の中の船体

万円)の支払いにより「解決」としましたが、その後も米国の太平洋核実験は続けられ、拡大された危険区域の迂回等による被害が計上されていきます。

4. 第五福竜丸の保存と展示館

第五福竜丸の船体は1954年5月、文部省（当時）経費2,100万円で船主より買い上げ、8月東京に曳航、10月31日東京水産大学の所属船として品川の岸壁に繋留され放射線の減衰が観察されました。東京大学・木村健二郎教授、水産大学・佐々木忠義教授らが船上で金魚を飼い、朝顔を栽培、水産大学・熊凝武靖教授が船具の焼き捨てに立ち合ったと記録されています。1957年三重県伊勢市の強力造船所で改修され、演習船「はやぶさ丸」として再出航することになりました。老朽化で1967年に廃船処分されるまで、学生たちが使っていたのです。

冒頭で詳述したように、ゴミの中に放置された船は市民運動によって保存が呼びかけられ、何度も水没しかけながらも守られました。東京都は第五福竜丸展示館開館の趣旨として「遠洋漁業に出ていた木造船を実物によって知っていただくとともに、原水爆による惨事がふたたび起こらないようにという願いをこめて、この展示館を建設しました」と記しています（写真2）。

実は現存する木造船としての価値は重要で2020年

には日本船舶工学会で「ふね遺産」に認定されました。これは同学会が「次世代に伝えるべき文化的遺産」として認定しているもので、「西洋型肋骨構造による現存する唯一の木造鯉鮪漁船」という点が評価されました。「はやぶさ丸」に改修された際、上部船室やブリッジは鉄製となり甲板も張り替えられましたが、構造そのものは第五福竜丸（前身はカツオ船・第七事代丸）のままであり、船大工の技術を目の当たりにする存在でもあります。

5. 記憶の開封 表現の誕生

船体保存の格納庫として建設された展示館ですが、船の周りにはビキニ事件の詳細を伝える常設展示が置かれ、1950年代に使用されていたガイガー・カウンターや署名簿等の実物も展示しています。

第五福竜丸だけではなく、多くの漁船が「放射能汚染魚」を獲った位置の地図、核実験場とされたマーシャル諸島の被害、アメリカ、旧ソ連、イギリス、フランス、中国、インド、パキスタン、北朝鮮の核爆発実験場の地図、核実験年表、ラッセル＝アインシュタイン宣言等も展示されています。

また、年に1～2度テーマをきめて特別展も企画します。ビキニ事件から70年を経た2024年度は、「第五福竜丸の時代と漁師たち（2024年7月10日～9月29日）」と題して、乗組員の日用品や衣類を展示し、モノがもつ物語＝モノ語りを読んでもらう企画でした。これらの資料は展示館開館直前、保管していた東大の倉庫から見つかり、寄贈を受けたものです。当時の遠洋延縄漁の様子は、記録映画『荒海に生きる』（亀井文夫監督、1958）の一部を特別上映しました。また久保山愛吉さんの命日である9月23日には、船室に残されていた楽譜から、乗組員たちがギターを弾きながら歌っていたと思われる楽曲を聴くコンサートを開催し、70年前に思いを馳せました。

流行歌や商業ソングは記憶を刺激します。公園内にある展示館は、遊びにきていた人たちが散歩のついでに、ふらりと立ち寄る場所でもあります。予想していなかった木造船が目の前にそびえているのを見て「ああ、第五福竜丸。そうそう、ほらなんだっけ？久保山さん？」と、突然話し始める方が、よくおられます。この日のコンサートでも懐かしそうに目を細める高齢者の姿がありました。

現物がそこに在ること。その唯一無二の存在感は、封印され忘れかけていた記憶を開封するのだと思います。

またその「存在感」は、表現者たちをも刺激します。黒田征太郎、ヤノベケンジ、中ハシクシゲ、新井卓といった現代アーティストたちが、船と向き合い作品を作ってきました。画家・山内若菜は長さ15mの大作「ふたつの太陽」を、船体の横に展示しました（特別展 山内若菜「ふたつの太陽—命を紡ぐ小さな生きものたち」、2024年10月～2025年1月19日）。クラフト紙と和紙に広島原爆ドーム、被爆樹、プランクトンや昆虫等の小さな生きものたちが無数に描かれ、揺れるさまは壮観でした。全国からファンが駆けつけ、ギャラリートークは毎回たくさんの方が耳を傾けました。表現者の心が揺さぶられ、これまでビキニ事件に関心を持たなかったような人たちが、この船を知る契機となるのです。

6. 表現されるビキニ事件

ビキニ事件はこれまでも、多様なジャンルで作品になってきました。岡本太郎、ベン・シャーン、丸木位里・丸木俊、池田龍雄、上野誠、桂ゆき、小林喜己子と、事件直後の絵画・版画作品だけでも枚挙に暇がありません。1959年には新藤兼人監督の劇映画「第五福竜丸」が作られました（第五福竜丸平和協会がBlu-rayで復刻販売中）。この映画音楽がピアノ五重奏「ラッキードラゴン・クインテット」（作曲・林光）となり、ベン・シャーンの絵本から着想を得た吹奏楽曲「ラッキードラゴン～第五福竜丸の記憶」（作曲・福島弘和）も作られ、現在も多くの吹奏楽団が演奏をしています。事件の年には映画「ゴジラ」（本多猪四郎監督）も制作され、劇中に「放射能雨」や「原子マグロ」といった言葉も登場します。

こうした作品に出会った人たちが、船が現存することに驚き、訪れる。そんな出会いをいくつも経験してきました。船が残されているからこそ、乗組員の遺族が足を運ばれ、核実験に従事していた元兵士の遺族が来館します。

開館から50年、通算来館者は600万人を超えました。修学旅行や社会科見学で訪れる若い人たちは、平和学習を通して、ビキニ事件が描かれた作品に出

会うことができる。ここは、そんなたくさんの入口なのではないか、と感じます。

7. 太平洋核実験 80 年

自身の体験を話し、手記を残してきた大石又七が他界して 5 年。ビキニ事件の記憶を持つ人も多くが鬼籍に入られました。核実験場とされたマーシャル諸島でも同様です。日本で「ビキニデー」と呼ばれる 3 月 1 日、マーシャル諸島共和国は「核による被害者を追悼する日」として国の公式行事が営まれます。2026 年ヒルダ・ハイネ大統領は式典で、1946 年に始まった核実験から 80 年、「爆発の音はなくなったが、苦悩と悲嘆と挫折の余韻は今も響き続けている」とし、学校教育のなかで核実験被害の継承が取り組まれていること、またその歴史を保存する取組みとして Nuclear Museum 建設の構想を紹介しました。専門的知見の積み上げと Nuclear Legacy の継承を目的とするものです。プロジェクトの一環で、マーシャルから日本に博物館研修に来ていた専門家が第五福竜丸展示館も訪れました。また若い世代を中心に日本とマーシャルとの交流も、ゆるやかにひろがっています。

コロナ禍がおさまって以降、海外から来館される方も増えています。核兵器保有国、核配備国からもやってきます。来館者ノートには「貴重な真実を知

る場」「大切な歴史を語る船」という言葉が並びます。2027 年、船は建造 80 年を迎えます。通常 20 年が限界と言われる木造船が傘寿を迎えるのは、たぐいまれなことです。船体保存の技術は未知の部分もありますが、専門家の助言もいただきながら、これからも船との新しい出会いを作っていこうと思います。

(文中敬称略)

〈第五福竜丸展示館〉

東京都江東区夢の島 2-1-1

開館時間 9:30~16:00 (月曜休館)

入館無料

URL <http://d5f.org>

参 考 資 料

- ・第五福竜丸平和協会編、『ビキニ水爆被災資料集』(1976)
- ・大石又七、『ビキニ事件の真実—いのちの岐路で』(2003)
- ・豊崎博光、『マーシャル諸島核の世紀 1914 - 2004』(2005)
- ・第五福竜丸平和協会、『第五福竜丸は航海中—ビキニ水爆被災事件と被ばく漁船 60 年の記録』(2014)
- ・Isotope News, 1984 年 3 月,「特集ビキニ事件から 30 年」
- ・エネルギーレビュー, 2003 年 8 月「特集 第五福竜丸事件から 50 年」

((公財)第五福竜丸平和協会事務局長)